

# 「そのなかみ」考 (二)

本論考は前に、「大阪樟蔭女子大学論集」(第十九号)で、「そのなかみ」と題して、「そのなかみ」の意義・用法を広く平安初期の文学作品から流して概観してきたが、今回は、平安初期の作品のみに限定して、紙幅の許す限り、用例を残さず集めて、つぶさに検討を加えることにする。

「そのなかみ」という語彙については、漢籍文を見ると「華嚴宗祖師伝巻上——建治二年権僧正宗性書写」(東大寺図書館蔵)に、  
 ……仍<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>去<sup>ル</sup>天平十二年<sup>ニ</sup>屈<sup>テ</sup>請<sup>フ</sup>其<sup>ノ</sup>師<sup>ヲ</sup>集<sup>メ</sup>京城<sup>ニ</sup>名<sup>僧</sup>。方<sup>ニ</sup>始<sup>メ</sup>就<sup>テ</sup>三<sup>ツ</sup>金<sup>ノ</sup>鐘<sup>ノ</sup>道<sup>場</sup>講<sup>ニ</sup>演<sup>ス</sup>此<sup>ノ</sup>一<sup>乗</sup>三<sup>門</sup>当<sup>ノ</sup>三<sup>時</sup>紫<sup>雲</sup>巨<sup>覆</sup>春<sup>山</sup>天皇御覽<sup>ニ</sup>奇<sup>蹟</sup>无<sup>量</sup>。 (注<sup>一</sup>)

とあり、また、「真福寺本・遊仙窟——文和二年書写」(貴重古典籍刊行会・複製本)に、  
 ……宛<sup>テ</sup>転<sup>ス</sup>入<sup>ル</sup>懷<sup>中</sup>。当<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>腹<sup>裏</sup>癪<sup>狂</sup>。

とあり、「当時」の二字漢字を「華嚴宗祖師伝巻上」中に「当三時」と、「当」と「時」を分離させ返読の訓法をとっている。ま

## 北村 英三子

た、「真福寺本・遊仙窟」の例文中に示した「当<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>」の左訓のごときも「トキニアタリテ」と「当」と「時」を分訓し返読の訓法をとって、「その時」という語彙で使用しているのは興味を引く。もっとも、「真福寺本・遊仙窟」における「当<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>」は二様の訓みが附されている。一方の傍訓は「当時」二字漢字で「ソノカミ」と熟語訓が附され一訓として扱う訓法で、もう一方の左訓は、前に述べた通り、「当」と「時」を分訓して返読の訓法をする場合の二通りの訓みが認められるが、恐らく、返読の印、すなわち「」が附されており、また、前に示した「建治二年書写」の「華嚴宗祖師伝巻上」に「当<sup>ノ</sup>三<sup>ツ</sup>時<sup>ノ</sup>」とあるところから、「トキニアタリテ」と純然たる漢文に即して訓む方が、「ソノカミ」と一訓で訓むより古い訓みではないかと考えられる。その後、意味に即して「そのなかみ」と訓むようになったと思われる。そして、平安時代の人々は、「そのなかみ」という訓法の方を多く文学作品中使用していたのではないかと考えられる。

また、前稿でも少し触れた「神田本・白氏文集・天永点（古典保存会・複製本）」に、「当時」の二字漢字に「そのかみ」と和訓が附されている箇所があった。すなわち、

○当時美人猶恨悔（大行路）

○当時（シノカミ） 自以為深固（草茫茫）

とあり、意味に即して「当時」の漢字に「そのかみ」と附されている。

では、「当時」の漢字音としての言葉「当時」が国語化して、我國の古典文字作品中に古くどのような意義・用法で採り入れられていたか、興味を引くところである。従って、古典語としての「たうじ」と、現代語として使用されている「当時」の意義は必ずしも同一ではないと考えられる。このようなことを問題にして、今回は平安時代初期の作品から用語例をすべて抽出して考察してみたい。

まず「伊勢物語」における「そのかみ」という語から検討する。  
○山のみな移りて今日（けふ）にあふことは春の別れをとふとなるべし  
とよみたりけるを、いま見ればよくもあらざりけり。そのかみはこれやまさりけむ、あはれがりけり。△七十七段▽

と、「伊勢物語」においては、この箇所一回きりの使用で終り用例が稀であるため、この作品として際立った特徴を見ることが出来ないが、物語作者が歌を評している地の文に使用している。意義は現代語としての「当時」と解するのが適當で、後世の作品に見られるような「昔」とか「現代」という意義ではない。ここに例示した

「伊勢物語」の文をよく見ると、「いま見ればよくもあらざりけり」の「いま」という語と「そのかみ」という語を意識的に対立させて使用している感がある。

こう考えると、この「そのかみ」は現代語としての、「当時」の意に解することが出来、かなり「昔」という要素を強く備えていることが知れる。そして、文脈上和語が勝っているため漢語「当時」は忍び込み難く、和語としての「そのかみ」が使用されている。従って、「伊勢物語」の作品中においては、漢語「当時」の用語は一例も見ることが出来なかった。

次に「大和物語」における「そのかみ」を検討してみる。  
①土佐の守にありけるさかゝる人真といひける人、病して弱くなりて、鳥羽なりける家に行くとしてよみける。  
○「ゆく人はそのかみ来むといふものを心ばそしなけふのわかき。」  
これは△百二段▽

②「いとあさましきに、さらに物もきこえず。身づからたゞいま参りて」と「なむいひたりける。かくてすなはち来にけり。そのかみ塗籠にいらにけり。△百三段▽

③女「こゝにも、さ思ふに、人の心ざしの同じやうなるになむ思ひわづらひぬる。さらばいかゞすべき」といふに、当時、生田の川のつらに、女平張をうちてゐにけり。△百四十七段▽

④「いとよきことなり」といひて、射るほどに、一人は頭のかたを射つ。今一人は尾の方を射つ。当時いづれといふべくもあらぬに、女思(ひ) わづらひて、△百四十七段▽

⑤一人は足をとらへ、いま一人は手をとらへて死にけり。当時、親いみじく騒ぎてとりあげて、なきのゝしりて葬りす。△百四十七段▽

⑥「いな、いとなれたりける人ありければ、憂き事もこれなりや。しばし」と言ひをこせたり。そのかみ男思ひけるに、世に憂き心ちして、「もし然か」と問ひければ、△附載説話□▽以上六例が見当たる。百一段においては歌の部分に、続いて百三段には地の文に、百四十七段には集中的に三語とも地の文に、附載説話□においても地の文にそれぞれ表われている。この「大和物語」に關しての「そのかみ」については、鎌倉時代の成立である「清輔奥儀抄三」に次のように解かれてゐる。これは注目に値する解説書として示しておきたい。

十五 問云 そのかみとはすきにしかたをいふ也文字にも当初とかけると酒井人真かやまひたいしにて山里へゆく時の哥云  
ゆく人はそのかみこむといふものを心ほそしやけふのわかれ  
とよめるはいかに

答云 そのかみは当時ともかけりそのおりと云こと也さればすきにしかたをも今ゆくすゑをいはんにとかなし大和物語にくたの海に身なけたる女のことにはにもそのかみおやいみしくきはきてとある當時のこと、きこゆこれならすあまた侍りこの解説の間に、用例①で示した「ゆく人はそのかみ来むといふものを心ほそしなけふのわかれば」の歌の一首中の難語として、「そのかみ」を引出し、問題提起しているのは興味を引く。そして、答云の部に「当時ともかけり、そのおりと云こと也、さればすきにしかたをも今ゆくすゑをいはん」と問答体で解釈を加えており、藤原清輔の豊富な学殖を伺い知ることが出来る。

用例③④⑤の百四十七段においては、三語とも「古典文学大系」の校注者達が「当時」の漢字を当てているが、漢字の当て方については種々問題があると思うので、後稿に譲るとして、ここではこの「大和物語」に關する「そのかみ」の統一的な意義を考察してみた。

用例①は、前に示した「清輔奥儀抄三」によると、この和歌に使用されている「そのかみ」は、一応一首中の難語として注目されており、和歌を注釈する上で中心となる大切な用語であると考えられる。「答云……そのおりと云こと也」と解かれているごとく、「そのおり」とか「その時」と解するのが適當である。また、「日本古典文学全集」の頭注に、

「そのかみ」は、そのとき。出かけていくそのとき。間接話法的表現。直接話法的には「ゆく人は『今来む』といふ」。「今来

むといひて別れし人なれば」(五十五段)

と、五十五段の和歌「今来むといひて別れし」の「今来む」を指摘して、その見解が述べられているのは注目すべきである。

このように「そのかみ」という用語は、韻文にも見当たり、次に、逐次検討を加えていく散文にも散見される。

用例②③④⑤⑥の諸例はすべて散文中にその語が使用されている。意義は用例①と同一で「そのおり」「その時」と訳すのもっとも相応しい。そして、「事のあつたその時点」「ある事が起つたその時点」を示す場合に用いられており、前に検討してきた「伊勢物語」の意義である「当<sup>まじ</sup>時」とは異なりを見せている。結局、この「大和物語」における全用例の「そのかみ」の意義はすべて、「そのおり」「その時」と解され、統一的な意義を見ることが出来る。

また、用例⑤における「そのかみ」については「清輔奥儀抄」中に「いくたの海に身なけたる女のことにはもそのかみおやいみしくさはきてとある……」を問題にして引用してあるのは興味深い。

さて、「大和物語」においては、以上検討してきたごとく、「そのかみ」の語義として、すべての場合において、「そのおり」「その時」と解するのが適當である。

では、この「大和物語」において、「そのかみ」とは別種の語としての「そのをり」とか「その時」という語彙がどのような区別のもとに使用されているか、検討せざるを得ない。

「そのをり」に関しては、用例が稀で、次の一語しか見当たらない。

。「いみじうなけば、血の涙といふものはあるものになんありける」とぞいひける。「その折なむ走りもいでぬべき心ちせし」  
典文とぞ後にいひける。△百六十八段▽

この場合の「そのをり」は現代語でいう「そのおり」と格別異なつた意義は認められない。しかし、会話の発語に使用されているのは、この語の特色であろうか。用例が僅少であるためその特色を明確に知ることが出来ない。

では、「その時」という語はどうであらうか。

①さて心づきなしとやおほしけむ、もとの宮になむわたりたま

ひにける。その時に宮すむ所の御もとより、△九十四段▽

②今は昔、二人して一人の女をよばひけり。先立ちてよばひける男つかさまさりて、其時の帝近うつかふまつりけり。△附

載説話(一)▽

この二例しか見当たらず、散文からすれば、用語例が非常に僅少である。

「用例①の「その時」の意義は、現代語と何等変つた特色はなく、「その時点」を指す場合に使われている。用例②における「その時」は、用例①の「その時」の意義と多少異なりを見せており、「当<sup>まじ</sup>時」の(帝)と解することが出来、昔の要素を多分に含む「その時点」を指示している。試みに、用例①と用例②の「その時」という語を仮に、「そのかみ」という語彙に置き換えてみても、何ら意味の变化を見せず、「そのかみ」でも適用出来るが、「その時」という語彙

の使用も「大和物語」においては用例が稀であるため、古典の語法としての明らかな特色を見ることが出来なかった。しかし、「そのかみ」という語彙は、和語として伝統性をもつ古語としての語気が感じられ、また、「そのをり」「その時」という語彙は新語としての語気が感じられてならない。尚、この「大和物語」においても、「当時」という漢語は皆無であった。

では次に「伊勢物語」の形式で書かれ、「大和物語」と一致するいくらかの説話が所収されている「平中物語」の「そのかみ」は、どのような意義・用法で使用されているのであろうか検討してみよう。

①さりければ、帰り来て、夜ふくるまでうかがひて、その男の  
 来て、ものいふを聞きて、絶えてあはずなりぬ。そのかみ、  
 聞てこの女、使人のもとに居るところに、灯をともして見るに、  
 はむるまだ知らぬがあやしきぞ、集り居りける。△二十八段▽  
 ②この、かういふ女の家のあたりよりいきけるに、里へといひ  
 寄しはまことかとして、ものの気色も見むと、思ひはなたで、門  
 のうちのかたに、車など引き立てて、この品高き男の供なる  
 男どもなど、あまた立てりけり。そのかみ、ものいはで、奥  
 文字大にはひ入りて、隠れ立ちて、見れば、女、都押し上げて、か  
 〇〇の「高き人をぞいだしける。△三十四段▽  
 と、この二例しか見当たらない。

用例①の「そのかみ」の用法は、にせ者発見の時の事情を詳しく

始めから説明をし直している場合に使用されており、「その当時」と意味づけるのが適切である。

では、この「平中物語」中において、「そのかみ」とは別個に「当時」という語彙が、この作品中に見られるであろうか興味のあるところである。すなわち、和語である「そのかみ」と、漢語が国語化して出来た「当時」という言葉との和漢の区別を見たく思い調査してみたが、「当時」という漢語は残念ながら未だこの作品中に使用されていない。文脈上和語が勝っていて、漢語「当時」が介入する余地がなかったものと考えられる。

続いて、用例②の「そのかみ」の意義を考察すると、用例①の「当時」という意義とは異なりを見せ、「事のあった時点」を指し、「その時」と意味づけるのが適切である。

では、この「平中物語」の文中に「そのかみ」とは別個に「その時」という語が見当たらないのであろうか、検討を加えてみると、この物語の冒頭の語り出しの文中に次のように見られる。

いまはむかし、男二人して女一人をよばひけり。先だちてよ  
 りいひける男は、官まさりて、その時の帝に近う仕うまつ  
 るより、のちよりいひける男は、△一段▽

この一用例のみで、他には例を見ることが出来なかった。もっとも、ここに示した一例は、前に検討した「大和物語」の△附載説話(△)▽、すなわち、

。今は昔、二人して一人の女をよばひけり。先立ちてよばひけ  
 る男つかさまさりて、其時の帝近うつかふまつりけり。後よ

りよばひける今一人の男は、……  
と、大体一致する文中に、「その時」という語彙が使用されている。この「大和物語」の巻末に附されている「附載説話」は「日本古典文学大系」の頭注によると、

拾穂抄系統本巻末に付されているもので、底本にはない。内容は平中物語に大体一致するが、細部では省略や付加があり、散佚した平中物語異本文の遊離混入したものと考えられる。とあり、「平中物語」の異本文が「大和物語」に遊離混入したものと考えられている。従って、ここで問題にしている「平中物語」における「その時」の意義は、「大和物語」の「その時」の用例②で説明したごとく、「当時の帝（宇多天皇のこと）」と解し、物語の語り手が、宇多天皇の当時のことを指示して、「その時」と語っているのであるから、内容的には「昔」の要素を多分に含んでいる。であるから、「その時」と「そのかみ」は表現上のニュアンスはあるにせよ、ほぼ同義である。従って、ここにおいても試みに「そのかみ」という用語に、仮に置き換えてみても、何ら現代語に訳す場合には不都合を感じない。しかし、何分にも、用例が全文を通じて、この一箇所しか見当たらず稀であるため、古典語としての明らかな特色を知ることが出来なかつたが、前にも述べた通り、「そのかみ」の方は、和語として伝統性をもつ古語の語気が感じられ、一方、「その時」という語彙は、当時新語ではなかつたかと思われる。因に、後世の作品を手当り次第見てみると、「そのかみ」より「その時」の語の方が増加の傾向にある。結局、同義の關係にある「そのか

み」と「その時」は、古語と新語の相違ではないかと考えている。では次に、平安初期の大作である「宇津保物語」の「そのかみ」を検討してみる。

この長編物語を吟味することは、後世の種々の作品に随所に散見している「そのかみ」の語義・用法を解く上で重要な参考となるであらう。

「宇津保物語研究会編」による「宇津保物語」本文編で調査してみると、「そのかみ」の用語は十四個数えることが出来る。すなわち、

①……つじかぜ、このまきあげしことを、この三人のいひひるたるまへに、ことをまきもてきて、おろしをきつ。そのかみとしかげ、このしら木ごとをこの人々に一つゝたてまつる。  
△一としかげ▽

②なをあくればかはらにいきて、人おほく車などある時は、そのほどすぐしていでゝみるに、みづかゞみのごとくこほれけり。そのかみこのこいふ、「まことに我孝のこならば、氷とけていはいでこ。孝の子ならずば、ないでこそ」△一としかげ▽

③めぐま・おぐまあらき心をうしなひて、なみだをおとして、おやこのかなしさをしりて、ふたりのくま、こどもをひきつられて、この木のうつほをこの子にゆづりて、ことみねにうつ

りぬ。そのかみ、この木のうつほをえて、木のかはをはぎ、ひろきこけをしきなどす。△一としかげ▽

④おとゞ「れいのものゝ上手ども、いとおもしろうあそぶに、侍従いできなむとおもふに、さらにいでこで、日のくれつれば、いとくちおしかりつるに、夕づけてかづけものよりいでくるものか。そのかみとらへてゑはして、『れいのことひきたまへ』といふに、さらにきかず。……」△一としかげ▽

⑤えみやづかひなどにもいださずなどしてありけるに、このなかよりの少将、本ノ(もカ)せちによばふ。そのかみちゝぬし、「かゝるたはぶれ人となはふるとん、わがむすめにつきてよをつくさむともしらず。……」△五さがのゐん▽

⑥「いせの君、そのかみこにたいめんしたりにしに、宮のうへの、まいらぬことをゆふかしげにの給けるを、いかで、思ふ事してまいりにしがな。」△九きくのえんふきあげのならび▽

⑦君「なにか、いまは天女いまそかりとも、なにかかみたまへん。たゞかゝるならひにはべるを、さる心ぢしもありしに、おぼつかかなからじとてこそ。もしは、はしはめていたくともかれをこそは。そのかみは、ごせんの上とひたきたてまつらば、おなじ事ぞや。」△十三くらひらきの上▽

⑧大将「あはれ、ふきあげにて、われらがあやしき事を、せぬわざ／＼をせしやは。われらは、かくかんだちめのはじめにてあり。かの中将もかくてあらば、いまとうなどにもなりなむ。そのかみ上らうにもあり、おぼえもありし人の、あはれにて山にこもりたる。ひきしくえこそとぶらはね。とぶらひ給や。」△十五くらひらきの下▽

⑨中納言「うれしきにも、まつものおぼえぬ物になん。むかし、さもせんかたなくまどはれ侍しかば、たましるをしづめんと、たび／＼、たゞ御文一くだりをみ給はんと兵衛をせめ侍しかど、えみ給はざりしを、そのかみしに侍なましかば、かゝるおりもなくてしすは。」△十六國ゆづりの上▽

⑩おとゞ「それは天下に御まうなくつやつつき給へるおとこ、ひとたびに三四むまれ給へるみぞうるだに臣、下のもろくちと申す事は、えいなび給はぬことなり。そのかみ、むこもしうとも、心をひとつにてうれへそうらん。これこそむつかしけれ。それも、よう思ひ時は、女こもあれば、ざりとも思ふものを」△十七國ゆづりの中▽

⑪大将「このかすがに侍りし少将なりよりの、入道して侍とぶ(なかりカ)

らひに、そのときのおなじく急のひとなり。これかれいまはなかつてもかくかたちめにてはんべり。あるは頭なんどにても侍を、るいはしてとぶらひにまからんとす。」そのかみ、御せん給はりてあそび侍しよろこび申給事、きはまりなし。」△十七國ゆづりの中▽

⑫「としごろはなに事かし給つる。一日こゝに物し給へりしは、かの山ざとにおはせしぞかし。そのかみは中将にぞありし。それは、よろづの事するなかに、きんのじやうずぞ。…」△十七國ゆづりの中▽

⑬むすめ「さればこそ、しにいりてひさしかむめりしか。山へいるとてこそいきいでたりしか。かのかみ侍じうなりし人だにかくなりたまふれば、かの君、いまは大臣にもなりなまし。」△十八國ゆづりの下▽

⑭かんの殿、き丁のほころびよりみたまふに、十ばかりにてげに見給しもの也。あはれに、げにそのかみおぼゆる人なり。  
△廿楼のうへの下▽

以上のごとき用語例を抄出することが出来たが、既に周知の通り「宇津保物語」の本文は、誤脱や錯簡や意味不詳の箇所が頗る多く、諸書に異文も甚だしい。従つて、右に抄出した十四個の用語例においても、かなり異文が認められ、ここで問題に採り上げている「そ

のかみ」という語彙が、同義語「そのとき」と入れかわっている箇所もあり、非常な戸惑を感じている。しかし、この小考においては、「宇津保物語研究会編」（笠間書院刊）の「宇津保物語—本文編」のみを手かりとして、考察を進めていくことにする。  
では、右記の十四個の用語例の意義を考定し簡潔にまとめて表示すると、

用例の番号		「そのかみ」の語義
①	地の文	その時
②	地の文	その時
③	地の文	その時
④	話語	その時
⑤	地の文	その時
⑥	話語	その時
⑦	話語	その時
⑧	話語	その時
⑨	話語	その時
⑩	話語	その時
⑪	地の文	その時
⑫	話語	その時
⑬	話語	その時
⑭	地の文	その時

以上の通り、「そのかみ」の語義を解することが出来よう。こ



で「そのかみ」の語義の一つに「その時」と解される場合があるのにもかかわらず、「そのかみ」と同義の「その時」という語が本文中に随所に散見している。従って、「そのかみ」と同義語である「その時」と比較して用法の差違を検討してみたく思うが、前に述べた通り、この作品においては、本文が乱れに乱れており、「そのかみ」の箇所が「その時」と入れ替わっている異文もあり、「そのかみ」と「その時」という二種の語が混乱をみせている感がある。であるから、この問題に関しては、今回は論外としたい。

では先程から興味を感じている「そのかみ」と、一見同義語のようには思われる「たうじ」という漢語について見てみると、「宇津保物語」の本文中に珍らしく二語のみ見当たる。そこで、「当時」の意味を有する「そのかみ」と、またこの語とは別個に表われる「たうじ」の語義・用法の差違を検討してみたく思う。

「たうじ」の用語例は、

①「……しかあれど、たうじのはかせ、あはれあさくどんよくふかくして、れう給はりてことし廿ふねんになりぬるに、ひとつのしきあてず。……」八六まつりのつかひさかの院の  
ならび

②「たうじにをや侍まさよりがおとこどもまかりなり侍りて、かれらがをくれ侍らんは、このあそんのれいのみ侍らんことなん、いとおしくかなしう侍り。……」八十六国ゆずりの  
上

この二例見当たる。いずれも話語として使用されており、語義は

二例とも「只今」と解することが出来よう。このように考察してみると、一見「そのかみ」と同義語の性質を有するように思えたが、この作品においては、「そのかみ」と「たうじ」とは別種の語として扱っていることがわかる。

再び用例①の「たうじのはかせ」の「たうじ」の語義について記しておきたいことがある。原田芳起博士は、「その事を行なった」「その事にあたって」と解され、「原田芳起校注・角川文庫」の「宇津保物語上巻」(二六三頁)に、「当時」の漢字が当てられている。そのお説は創見の卓見として紹介しておきたい。

さてこの「宇津保物語」に珍らしく「たうじ」という漢語が使用されていたが、「原田芳起著―宇津保物語研究考説編」で、「宇津保物語」は「遊仙窟」の影響を多分に受けているであろう」という見解を示されている。

これは前にも示してきたごとく、「遊仙窟」中に、「当時腹裏癡狂」「当時樹上」と「当時」の漢語が見られるところから、「宇津保物語」の作者は、この「当時」の漢字を「たうじ」とよんで使用したのではないかという気がしてならない。

また、「原田芳起著―平安時代文学語彙の研究」中に「宇津保物語の中の漢語」という断章があり、かなりの量の漢語が示されている。博士のご研究を借用すると、

ちうもち・ないはう・しちらい・どど・さい・みずく・ちし・  
ていふく・るぬだい・すかう・いちもち・せうすい・ちうずん  
・ちうばい

等をあげて論じられている。また、索引の中から、眼に止まる漢語を少し拾いあげてみると、

うしん・あいぎやう・いうそく・さいし・てんげ・てうはい・  
もんじやう・ふせ・やうだい・ひげ・あみださんまい・せかい  
・がく・がくしやう・ついしやう

等、次々見に止まる程多数の漢語を、「宇津保物語」の作者は使用している。こういった、漢語の多い文脈上、ここで問題にしている「たうじ」という漢語が見られるのも奇異ではないような気がする。

結局、「宇津保物語」の作者は、和語としての「そのかみ」と、漢語としての「当時」を区別し、別種の語として扱っていることがわかった。

以上、本論考においては、平安時代の初期の作品である「伊勢物語」「大和物語」「平中物語」「宇津保物語」についての「そのかみ」という語を吟味してきたが、紙幅の都合上ここで一応筆を擱く。

(注1) 鈴木一男先生の御教示による。

(注2) 原田芳起先生の御教示による。